いま・ここで創られる地域学
–2022 年度鳥取大学地域学部「地域学総説」の現場から–

白石秀壽*・村田周祐*・稲津秀樹*・岡村知子*・小林勝年*・岸本覚*・家中茂*

Creating Regional Sciences
：Through reviewing Regional Sciences Program 2022 in Tottori University

SHIROISHI Hidetoshi*, MURATA Shusuke*, INAZU Hideki*, OKAMURA Tomoko*,
KOBAYASHI Katsutoshi, KISHIMOTO Satoru*, YANAKA Shigeru*

キーワード：地域学，学際性，超学際性，交錯する知，気づき
Key Words: Regional Sciences, Inter-disciplinary, Trans-disciplinary, Crossing Knowledge Boundary, Awareness

1．2022 年度地域学総説のテーマと意図

本稿の目的は，地域学の確立に向けた手がかりを得るために，ゲスト講師・学生・教員の「知」が交錯する地域学の現場を記述することにある．地域学総説 B の最終回の講義を舞台に，「いま・ここ」に地域学が創られていく瞬間を記していく．

新型コロナウイルスの世界的流行の影響を受けつつも，2 年ぶりに対面形式の講義となった 2022 年度の地域学総説 A・B では，可能な限り講師をお迎えする講義スタイルとした．新型コロナ感染拡大と共に入学し，オンライン中心の大学生活を過ごしてきた 3 年生に，可能な限りゲストと向き合い「私の地域学」を組み立てる手がかりを提供したいと考えたからである．

2021 年度に続き，私たちが選んだテーマは「つなぐ・つながる」だった．新型コロナウイルスの流行は，リモートワークやオンライン講義など，デジタル社会への移行を強力に推し進める要因となった．時間と空間の制約から解き放たれていく，私たちの「いま・ここ」は，いつでも／どこかの／誰か／何かとつながっていられる社会へと着実に変化しつつある．

そこで，私たちは「つなぐ・つながる」というテーマを全体として掲げ，2022 年度の地域学総説 A・B を構成した（資料I：2022 年度地域学総説講義計画）．私・私たちが暮らしの場を創る営みを動的に理解したいと考えたからである．その理由は，本学の地域学の次のような指針にある．ひとつが，座学のための座学でも，実践のための実践でもなく，両者を有機的に結びつけるテーマを時流に応じて探究していくことが地域学に求められる構えであると考えているからである．もうひとつは，本学の地域学の特徴である「〈わたし〉の〈いま・ここ〉からの視点」を大切に，そして批判的に継承するためである．私・私たちの暮らしの場である地域は，時代の潮流に応じてゆるやかに変化を続けている．この変化を受け入れ，向き合うことから，地域学の確立に向けた手がかりを模索したい．

以下，2022 年度「地域学総説 B」の最終回において「地域学総説 A・B」にお招きしたゲストの「知」と講義を再解釈する教員と学生の「知」が螺旋運動のように交錯することで，「いま・ここで創られる地域学」の在り様を，ここに記録しておきたい．

2．地域学の系譜とその特徴

（村田）では，2022 年度地域学総説 B の最終回をはじめます．皆さん，この授業を履修していただきありがとうございました．皆さんのおかげで地域学総説 B を授業として成り立たせることができました，感謝しております．

最終回の本日は，地域学総説 A・B のまとめを実施したいと思っています．まとめをどのように実施していこうかと，これまで教員間でずいぶん話し合ってきました．ここ数年間は，稲津先生や村田が中心となってまとめを実施してきたのですが，どうしても社会学的な視点からのまとめになってしまう．そこで，今回はマーケティングが専門の白石先生のお力を借りたいと思っています．はじめに村田が少し話題提供をし，その後白石先生にまとめのお話をしていただく予定です．最後には，学生のみなさんも交えてディスカッションをしながら，みんなで「いま・ここで創られる地域学」を共有していきたいと思っています．時間が余れば，各先生方からもコメントいただきたいと思っ

*鳥取大学地域学部

ています．みんなで共に地域学を創っていく，共有していく，そんな時間にしていきたいと思っています．

はじめに皆さんに最終レポートについてお伝えしておきます．2週間後の8月10日が提出日です．各講義に関する参考文献リスト，これまでのコメントシート，記録動画などをManabaにアップしておきますので，それらを参考にレポートを完成していただければと思います．この授業の目標は，初回のガイダンスでお話ししたように，自分の言葉で地域学について語れるようになることです．3年生になって専門ゼミに所属し，みなさんは専門分野について学びはじめたところだと思います．そのような時期だからこそ，私も含めて忘れがちなんですが，ここは地域学部だということ，みなさんは地域学部に入学し卒業するということに改めて向き合わなくてはならないと思っています．私たち研究者はそれぞれの専門分野ごとの学会に所属し，専門知について議論して論文を書くことで生活を成り立たせています．つまり，学術的専門性を看板にすることで生活が成り立ているわけです．けれども，皆さんの多くは違う．地域学部で地域学を学んだ者として，これから社会に飛び出していかなくてはならない．ですから，自分の言葉で地域学部や地域学について語れるようになることが必要になるわけです．

次に，地域や地域学というものがなぜ現在必要とされているのか，学ばなくてはならないのかということについてお話したいと思います．ひとつが歴史的で現実的な背景になります．いわゆる「地域のつながり」というものは市民社会化や近代化という大きな潮流の中で「しがらみ」として扱われ，徹底的に否定をされ続けてきました．それを象徴する言葉が「むら社会」ですね．その土地で生活のために住民自らが創り出してきた「むら」などの住民組織は解体の対象であり続けてきました．現在でも，それらからどうやって人々を解放するのかということが声高に叫ばれ続けています．しかし同時に，「地域のつながり」というものは，ひとりひとりの生活を保障する役割も担っていたわけですね．しがらみと生活保障は，コインの表と裏，一対の関係なんですね．「地域のつながり」に代わる生活保障の存在として期待され登場したのが市場でした．お金を媒介とする市場サービスで，私たちの生活を保障していこうとしたわけです．けれども，格差社会なんて言葉があるように，市場は持つ者と持たない者によって，受けられるサービス量や質に格差が生じてしまう．いわゆる貧富の差ですね．そのため，市場サービスだけでは，なかなか私たちの生活を保障することは難しいということになった．そこで，福祉国家と呼ばれるような国家制度を充実させることで，市場サービスを補完していこうという話になった．ところが，誰が制度保障の対象になるのかという問題や財源の問題などで，それもまた行き詰ってしまった．そこで，市場と制度に加えて，もういちど「地域のつながり」にも期待していこうという時代が再来しているわけですね．その具体的な取り組みが，皆さんが地域学部の授業で頻繁に耳にするNPOとか，新しい公共とか，福祉社会とか，地域包括ケアとかなんですね．その大きな流れの中に地域学部も存在していると言っても過言ではないのかもしれません．こうした歴史的で現実的な文脈から，現在の地域や地域学の存在意義を説明することができるんですね．

別の説明の仕方もあります．私の専門である社会学では「移動性」というキーワードが流行しています．この「移動性」を軸に，現在なぜローカルに注目が集まっているのかについて説明をすることができます．いわゆる情報化社会になって，グローバル化も浸透した現代は，移動性が高度化した社会だというんですね．オンライン授業がその典型ですけど，「いつでも・どこでも」が基調になった社会が到来したということです．スマホでいつでもどこでも買い物が出来るし，コンビニに行けば日本中いつでもどこでも同じものが買える．「いつでも・どこでも」があたりまえの時代，標準となった時代だからこそ，「いま・ここ」にしかないモノゴトが価値を帯びてくるんですね．ただし，ここで言う価値とは，「いま・ここ」に存在するモノゴトそのものに見いだされているわけではないんですね．そのモノゴトではなく，例えば「東京にはない」ことや「コンビニにはない」こと，つまり「いつでも・どこでも」では“ない”モノゴトに価値や意味が見いだされていると考えるわけです．それは「差異」が価値を生み出す時代といってもいいのかもしれません．

さて，ここまでお話をして，社会学だ，と感じるわけです．社会学は，その時代その時代の力学の中で，なぜこの現象が存在しているのかについて大変に鋭い分析や説明を加えることができる．けれども，それ以外は不得意であるともいえるんですね．そんな細分化した学問領域の限界を乗り越えようと，1980年代から1990年代ぐらいですか

ね，学際的な学部がたくさん新設された時代がありました．いろいろな学問領域を横串にして学んでいく学際性の大切さは，現在も変わることなく叫ばれ続けているんですね．その延長線上に私たちの地域学部も存在していることは確かです．ところが，2018 年度の地域学総説の中で，家中先生という方が，私たち地域学部が営んでいるのは学際ではなく，超学際（トランスディシプリナリー）なんだと言いはじめたわけです．実は地域学が扱っている知とは，研究者が生産する「学問の知」だけではないのではないか.「学問の知」以外にも，行政の知，NPO の知，農民の知，企業家の知，いろんな知を扱っているではないかというんですね．こうした「地域の知」を「学問の知」と同格に扱って学んでいるはずだと話されたわけです．それこそが，地域で地域から学ぶこと意義なのではないかと．鳥取大学の地域学は超学際であると語るようになったのは，それ以降ですね．

なので，私たち地域学部というのは,「地域の知」と「学問の知」を同時に学んでいるというよりも，同格に扱っているということに意味があるんですね．同じぐらい価値があると考えてみる発想を大切にしたいということですね．そのように考えるからこそ，学部の根幹授業である地域学入門と地域学総説に，たくさんのゲストを地域からお呼びして登壇していただいているわけです．そして，地域調査プロジェクトでは，私たちが地域に出て行く．地域に来ていただいたり，出て行ったりの往復のなかに，地域学部の必修授業が存在しているんですね．地域の学びの拠点になるという発想だけでは，大学が一方的に地域に教えていくという立場を取ってしまう．つまり,「地域の知」を格下に扱ってしまう．そうではなくて，大学と地域の往復のなかで，地域が大学から学ぶだけではなく，大学も地域からも学ぶんだというように変わってきたわけです．繰り返しになりますが，この根幹には,「地域の知」と「学問の知」は同格なんだという考え方が存在しているんですね．1 年生の地域学入門で地域に来ていただく，2 年生の地域調査プロジェクトで地域に出ていく，そして再び 3 年生の地域学総説で地域に来ていただく．この地域と大学の往復の中にこそ,「地域学」が立ち現れてくるんだと考えているわけです．

さて，地域と大学の往復の中で立ち現れる地域学なのですが，その特徴について，いろいろな先生方が語ってきたわけです．それについて少し振り返っていきたいと思います．まず，地域学を牽引されてきたひとりに，藤井先生という人文地理学の先生がおられました．この藤井先生は，いつも地域には個性があるんだということを語っておられました．つまり，城下町とか，農村とか，漁村とか，その土地には生い立ちの固有な歴史がある．そしてなによりも，その土台には自然がある．それは砂丘なのか，海辺なのか，山なのか，平野なのか，湿地なのか，その自然条件に応じた土地の生産力や対応してきた土地利用がある．それを想像するためには，空間的・時間的想像力を拡張させることが大切であるとおっしゃるわけです．地域学の「“地域”を把握する 5 つの視点」（柳原 2020）[1] で言えば,「歴史的視点」（時間的想像力）と「移動の視点」（空間的想像力）を大変に大切にされていた．その歴史条件や自然条件が生み出す地域の個性に応じて地域課題もその解決法も違うのだと．同じ産業の衰退という地域課題でも，城下町なのか，新興住宅地なのか，農村なのか，漁村なのか，その地域の個性に応じて具体的な問題は大きく異なるのだと．地域のこれまでとこれからを考えるとき，この個性を忘れてはならないということを大変に大切にしておられたと思います．

そして次に，家中先生と福田先生という先生方です．このお二人が大切にされていたのが，先ほど紹介した超学際としての地域学ということですね.「学問の知」と同格に「地域の知」に学んでいこうということです．ここで大切なことは,「地域の知」とは，いつでもどこでも普遍的に通用する知ではないかもしれない．けれど,「いま・ここ」で生活するためには大切な知なのだと語っておられた．藤井先生がおっしゃっている,「地域の個性」とセットの考え方ですね．その土地その土地の個性に応じて，地域の問題は立ち現れている．だから，当然その問題解決の方法や手法もその個性に応じる必要がある．そのために，そこで生活を成り立たせていくための知や経験を「地域の知」から学ばなくてはいけないのだということですね．地域学の「“地域”を把握する 5 つの視点」（柳原 2020）で言えば,「生活の視点」を大変に大切にされていた.「地域の知」と「学問の知」の往復，この往復は「対話」であり，この対話のなかで「地域の知」と「学問の知」の融合を志す学問が地域学なんだとお話をされておられました．

さて，ここまで話すと地域学の考え方は，とてもややこしくなってきますね.「地域の知」と「学問の知」の対話とか融合って，これどうやってやるの，誰がやるの，ってなりますよね．

そこで大切になってくるのが，地域学の特徴である「“地域”を把握する 5 つの視点」のなかの「〈わたし〉の〈いま・ここ〉からの視点」（柳原 2020）なんですね．いまここに存在する私から考えようということです．これは仲野先生，そして柳原先生という先生方が大変に大切にされておられた発想です．地域学部での学びに登場する，国家制度の話とか，終末医療の話とか，自然の話とか，死者の話とか，遠い外国の話とか．企業活動の話とか．マイノリティや差別の話とか，それらは皆さんからは一見すると，バラバラな話に聞こえるかもしれない．けれども，私が生きていくためには，私がいまここに存在するには，医療って関係しているよね．国家制度って関係しているよね．死者（先祖）は関係しているよね．企業活動って関係しているよね．自然って関係しているよね．マイノリティや差別って関係しているよね．このように，いまここになぜ私が存在しているのかという思考を起点にすれば，私には「関係ないものはない」と，様々な領域をつなげて考えることができるのではないかというわけです．そして，私が存在するためには「学問の知」であろうが「地域の知」であろうが，そんなことは意味がなくなってくる．そのようにして，「学問の知」と「地域の知」を対話させ融合していく．そのときの主体は，他でもない私です．その「学問の知」と「地域の知」の対話と融合の主体となった私という存在こそが，地域のキーパーソンであり，地域学の目指す人づくりなんだとお話をされていたように思います．

この「〈わたし〉の〈いま・ここ〉からの視点」と「生活の視点」を絡めて，地域を「私・私たちの暮らしの場」と呼んでいるわけです．ここでとても大切なことは，「私たち」という時に，講師の先生方がお話をされたいたように，「死者」「自然」「他者」などをそこには含まれているという点ですね．地域は，現在生きている人間だけできているのではないと言うことですね．それで，地域学総説 A の最終レポート課題が，「あなたの暮らしの場のこれまで・これからについて考えてみてください」になっているわけです．そして，「地域学」の系譜を踏まえて，「私にとっての地域学」というテーマが地域学総説 B の最終レポート課題になっているわけです．

さてここまでは地域学の考え方とその特徴を，系譜を辿りながらお話ししてきました．ここからは，今年の地域学総説での私自身の気づきについて少しお話をさせていただきます．2019 年度に．「想像力としての地域学」というテーマで地域学総説を実施したことがあります．その時はその時で多くの気づきがあったのですが，今年の地域学総説のなかで「地域学における想像力」について，私なりの大きな収穫がありました．どうやら地域学における想像力とは，二重否定でしか表現できないのではないかという気づきです．それは前回の講義で岡村先生がお話をされた二重否定でしか表現できないものごとがあるというお話からの着想でした．つまり，様々な領域をつなげる対話と融合の土台には，二重否定でしか表現できない，「私に関係ないものはない」という想像力こそが，地域学の基本的な発想なのではないだろうか．私からスタートするためには，二重否定の想像力は大変に大切な発想だと考えたわけです．

さて，ここまでお話をしてきて，少しむなしくもなってくるわけですね．地域学の系譜の話は，稲津先生と村田の間にある地域学といってもいいと思います．二人で，あーでもないこーでもないと話すなかで生まれてきたからです．社会学を専門とする二人だから，どうしても全体図や輪郭を描くのが好きなんですね．じゃあ，先ほどお話したキーワードである「対話」の中身について語れと言われると，私は絶句してしまうわけです．対話が大切なキーワードなんだという指摘で止まってしまうんですね．中身の説明をするのことが，とても下手なわけです．実は，今回のまとめの回をどうするのかという話し合いの中で，私が総説をまとめることの限界に気づかされたわけです．そこで今回は，白石先生に地域学のいう「対話」の中身についてお話してもらおうと考えています．

では，白石先生にバトンタッチをしていきたいと思います．私たちが地域学総説の講義で行ってきた「対話」，地域学の言う「対話」とは一体どのようなことなのか，白石先生の力を借りして，その中身について考えていきたいと思います．よろしくお願いします．

3.「しろうと理論」から考える

（白石）　村田先生からバトンタッチしました．白石です．持ち上げられてしまいましたね．偉い先生もたくさんいるし，話しにくいなあと思っています．僕の専門はマーケティングですが，今日の内容は，マーケティングではありません．今日は，地域学総説 A と B を通して，僕が考えてきたこと

をお話しします．これまでの地域学総説において，大学教員（研究者）だけでなく，多くの実務家が登壇されてきました．それらを振り返って，学生の皆さんが学び考えてきたことを，僕なりに整理してみました．僕の話すことが，正しいとか正解であるとか，そういうことを言いたいのではありません．僕の話を聞いて，これまで地域学を作ってきた先生方や学生の皆さんが考えたことについて，議論してみたいと思います．

地域学には，たくさんの特徴があります．僕には，そのすべてを考慮するのは難しいのですが，議論の出発点として，次の3つを共通の理解（前提）にできると思います．第1に，村田先生の話にもありました通り，地域学は学問（学術的知識）と同じか，それ以上に実践（実践的知識）を大切にしているということです．だからこそ，学外から多くのゲストをお呼びして，授業をしてもらっているわけです．第2に，地域学は，田舎ないし地方を対象にした学問というわけではないということです．5月25日の地域学総説Aでは，恵比寿新聞の高橋ケンジ様に「伝える－身近な他者こそ面白い」というテーマでご講演を頂きました．彼が活動している恵比寿という街は田舎ではありません．地域の，田舎の，地方のことを学ぶために，地域学部に入学した方も多いかもしれません．しかし，実際の地域学は「田舎の学問」ではないわけです．そして，田舎の学問ではないからこそ，第3の特徴が重要になります．その第3の前提とは，「〈わたし〉の〈いま・ここ〉からの視点」です．地域学総説A・Bでは，畳屋，住職，そして小説家といった様々な方が登壇しました．しかし，皆さんのほとんどが，畳屋にはならないし，住職にもならないし，小説家にもならないと思います．では，彼／彼女らから，我々は何を学んでいるのでしょうか．

突然ですが，皆さんに質問があります．虹を見たことはありますか．うなずいてくれている人が多いですね．では，次の質問に答えてください．虹は何色ありますか．一番外側の色は何色ですか．一番内側の色は何色ですか．虹は何本見えますか．もし2本目の虹が見えるとしたらそれはどこ見えますか．2本目の虹の色はどのようになっているでしょうか．1本目と2本目の虹の間のどうなっていますか．虹を見たことがある人でも，これらの質問すべてに完璧に答えられる人は少ないと思います，実はこれらの質問は，僕が考えたものではありません．MITの物理学者のウォルター・ルーウィンが授業の冒頭で学生にぶつける質問です．この授業は，ＮＨＫの教養番組「MIT白熱教室」として，日本でも有名です．DVDも出されています．ルーウィンは，虹が見えるメカニズムを物理学の理論で読み解いていきます．虹を見るには，太陽を背にした状態で，正面の空に雨粒があり，日光が雲などの障害物に遮られることなく雨粒に到達する必要があります．光は，雨粒に入り屈折する際には，様々な色に分かれるそうです．その屈折率の違いによって，一番外側が赤色で，内側が紫に見えます．そして，太陽光線が屈折・反射し，雨粒から出るまでに2回反射することがあります．すると，主虹（1本目の虹）の外側に，副虹（2本目の虹）を観察することができます．この副虹は，主虹よりも淡く，そして色が逆になっていて，主虹の10度上に見えるそうです．さらに，1本目と2本目の虹の間は少し暗くなっています．これをアレキサンダーの暗帯と言うそうです．最後に，1本目の虹の内側は白く光っているはずです．ルーウィンは，以上のことをすべて物理学の理論で説明できると授業で解説していきます．

ルーウィンは，授業の最後をこう締めくくります．「君たちが次に虹を見るときに，これまでとは全く違った見方をすることになる．虹の外側が赤であることを確かめ，2本目の虹もきっと探すはずだ．それは1本目のおよそ10度上にあり，もし見えたら色の順番が逆になっていることを確かめたくなるはずだ．さらに虹の内側の空の明るさも君たちは気づくはずだ．そしてアレキサンダーの暗帯を見つけようするに違いない．この好奇心は言わば病のようなものだ．もう元には戻れない，全部私のせいだ．一度知ってしまったもう後戻りはできない．この好奇心は一生つきまとう．しかし，君たちは虹の正体を知ることで喜びを感じたはずだ．虹の正体を知らない人に比べて君たちは虹を見るたびに多くのことを発見し，より豊かな経験ができるようになった．知識は財産となり知識で失うものは何もない．知識は隠された理を解く鍵だ．君たちはもうこれまでの君たちではないはずだ」．

ルーウィンが言うには，虹の美しさをより感じ取れるのは，物理学の理論を知っているからです．きっと皆さんもこの話を聞いた後，虹を見たら赤はどこにあるのかを確認し，2本目の虹を思わず探してしまうはずです．それは物理学を（ほんの少し）学んだからです．

では，虹の話を踏まえて，地域学総説では，何をしてきたのか，何を学んできたのかを考えてい

きましょう．皆さんは，虹を見たことがあるにもかかわらず，色の順番や2本目の虹の存在を知りませんでした．その理由は，人間が理論という眼鏡を通して現実を観察しているからです．これは，現実に対する観察や経験に先立つ理論とか，問題関心とか，背景知識とかそういうものが必ず存在しているということです．ここでは，観察や経験に先立つ知識のことを「理論」と呼びことにしましょう．理論とは何か．誤解を恐れずに言うならば，理論とは「先入観」なんです．僕の先生でもある，慶應義塾大学の小野晃典先生は，「理論は先入観である．人は誰でも物の動きや人の動きを検知して頭脳を使って認識すると．なぜ，そうなのか分かったと解釈したり，今後こうなるだろうと予期したりする．このような人の思想の礎石となるものが理論だ」と仰っています．この定義に従うならば，例えば「急がば回れ」も理論と言ってもいいはずです．理論が，人間の思考・行動の準拠枠になるというわけです．

理論にも，いくつかのタイプがあります．例えば，今10キロの物体と100キロの物体を同じ高さから落としたとしましょう．どちらが先に地面に到達するでしょうか．空気抵抗がないと仮定すると，物体は一定の加速度の下で落下するという落体法則という理論があります．この理論によれば，10kgの物体と100 kgの物体を同じ高さから落とすと，同時に地面に到達すると予測できます．これは，条件が同じであれば，鳥取でも，東京でも，はたまた地球の裏側のブラジルでも同じ結果が得られるはずです．社会科学の理論についても，検討しましょう．企業の利益率の高低は何によって決まるのでしょうか．経営学者のマイケル・ポーターは産業構造と戦略の違いであると答えています．つまり，もともと儲かりやすい産業と儲かりにくい産業が存在していて，その産業の中で，どのような戦略をとるのかによって，企業の利益率を説明するわけです．これは，ポジショニング論とか，ファイブフォースモデルと呼ばれています．このポーターの理論は，産業Aだけでなく産業Bや産業Cにおいても，企業の利益率の差を説明できるかもしれません．落体法則やポジショニング論には，（もちろん限界もありますが）時と場所に関係なく様々な現象に応用できるという特徴があります．このような特徴を有する理論を「科学的理論」と呼びましょう．これは，村田先生が言うところの「科学知」と言い換えてもいいかもしれません．

理論は“先入観”であるとすれば，次のような理論もあり得ます．タクシーの運転手は，どのエリア・時間帯でより多くの顧客を獲得できるのかという問題に対して，平日の昼間にある通りで多くの顧客をつかまえることができるという経験則を持っていて，それに基づいて行動しているはずです．実は皆さんも理論を作っています．例えば，大学の授業で単位を取るための経験則として，「教科書とレジュメを入手する」「授業に出て出欠カードを提出する」「授業で紹介した論点を自分なりに整理する」などの理論を無意識のうちに構築し，それに基づいて思考・行動しているはずです．これらの理論には，特定の時と場所でしか役に立たないという特徴があります．このような特徴を有する理論を「しろうと理論（lay theory）」と呼びましょう．しろうと理論は，市井の人々の知，生活地，実践の知，実務家の持論など，文脈に応じて様々な呼び方があると思います．もっと大雑把に「世界の見え方」と言ってもいいかもしれません．ちなみに科学的理論としろうと理論の違いは，経営学者の服部泰宏先生の『組織行動論の考え方・使い方－良質のエビデンスを手にするために－』を参考にしています．

ここまでの話をまとめると，理論には科学的理論としろうと理論の2つがあるということになります．では，この2つの違いについて，みていきましょう．一方の科学的理論は，研究者が作るものです．その目的は論文を書くためです．そして，その理論を使って，何かを説明したり予測したりするわけです．科学的理論には，一般化されているというという特徴があります．そして，物事を明示的，形式的に説明するために無矛盾な論理体系を持っています．他方のしろうと理論の作り手は研究者に限りません．誰でも作っています．しかし，その目的は大きく違います．それは使うための理論，使用理論（theory in use）なのです．しろうと理論は，僕らが思考し行動する際の準拠枠になっています．人によっては，自尊心を維持するためのものであるかもしれません．しろうと理論の場合には，理論を使って考えたり行動したりするわけです．ただ，この理論は一般化されてなくて特定の時と場所でしか役に立たない可能性があります．しかも場当たり的で曖昧で，時に矛盾することもあります．ですが，それを信じる人の思考や行動を導くものです．例えば，「ある村では雨乞いをすると雨が降る」ということを村人が信じているとしましょう．これだって理論と呼んでも

いいはずです．この雨乞いの理論は，特定の時と場所でしか役に立たないばかりか，現代人は科学的に間違っていると否定するでしょう．しかし，村人たちにとって，生きていく上で重要な信念のはずです．もしかしたら，為政者が，政治の手段として，雨乞いしているのかもしれません．あるいは，ただの儀式や祭りなのかもしれません．先ほどのタクシーの運転手の例で言えば，しろうと理論は，日常の業務をスムーズに遂行したり，より多くの売上を上げたりするために，必要なものです．しかし，その理論は，言語化されているとは限りません．しろうと理論を形成し使用する人々はなんとなく考えているだけで，それを言語化していないかもしれません．だから，しろうと理論（生活知や実務家の持論）を，言語化するだけでも意味があると思います．

これまでの話を整理すると，人は誰でも何らかの先入観を持って思考し行動しているわけです．地域の人々は，何らかの現実や問題（ある経験的世界）に直面して，自分自身のしろうと理論を構築したり更新したりします．これは，人間なら誰もが行っているはずです．人によっては意識していない人もいるかもしれません．

地域（経験的世界）と研究者との関係について，考えてみましょう．研究者は，地域で何が生じているのかを記述して，説明したり予測したりするための理論を構築します．地域に対して，ある程度の距離をとって，できる限り客観的に理論を形成します．しかし，別の方法もあります．それは，地域という現実に対して，地域の人々と同じ目線に立って，地域の人々が育んできた理論（しろうと理論）ないし生活知を獲得するという方法です．そのために地域に出てフィールドワークを行うわけですよね．僕は前者の方が得意でそれを実践していますが，村田先生が行うフィールドワークは後者だと思います．

では，改めて最初の問いに戻りましょう．地域学総説では，何をしてきたのか，何を学んできたのでしょうか．地域の人々は，自分なりのしろうと理論を形成し，それに基づき思考し行動してます．僕らは，この授業の中で，そのしろうと理論を学んでいるのだと思います．そして，地域の人々が実践の中で培ってきた，しろうと理論を学ぶことによって，自らの理論を再構築しているはずです．地域学総説という授業は，私が「いま・ここ」で生きていくための理論を再構築する営みなのではないでしょうか．

その理論は，科学的理論や科学知とは違って，言語化されていない場合もあるし，感覚的だし，非論理的であったりします．しかも，何が難しいかというと，ゲストは実践を語っているだけで，必ずしも理論を語っているくれるではありません．意識的に自分の理論や持論，世界の見方を語っているゲストは少ないかもしれません．だから，しろうと理論に触れることができるかどうかは，聞き手の背景知識や関心に依存します．常にゲストの理論に迫られるとは限らないし，同じ講義を受けていても，人によっては異なる理論に出会うかもしれません．しかし，ゲストのしろうと理論に触れて，世界の見方がほんの少し変わって，思考・行動するための準拠枠としての理論を再構築することができたならば，それは「私の今ここから考える」という地域学の方法を実践しているということになるのではないでしょうか．

最後に，冒頭で紹介したルーウィンの言葉を借りて，今日の話を締めくくりましょう．もし皆さんが，地域学総説という授業を通じて，新しい世界観に触れることができたならば，それはきっとこれまでの皆さんではないはずです．一度，それを知ってしまったらもう後戻りはできません．しかも，それは美しいものばかりじゃなくて受け入れ難い現実や見たくないものを考えざるを得ないようになるかもしれません．でも，何らかの理論に触れることによって確かに異なる世界を発見したはずで，その理論を知らない人に比べて，みんなはその理論を通じて多くのことを発見し，より豊かな経験ができるようになったはずです．そして，今度は皆さんの番です．自分の理論を形成し，そしてそれを伝えていくのです．本を書いたり，講演会を開いたりする必要はありません．きっと皆さんの言動や生き方に表れるはずです．レポートにだって反映されているはずです．その理論が，誰かの人生というか，誰かの世界観をほんの少し変えるかもしれません．それはとても素晴らしいことだし，それが地域学の本質だと思います．例えば，皆さんは，福島県の畳屋の久保木史朗さんの話を聞いて考え方が少し変わったかもしれません．そんな皆さんと出会った人もまた，久保木さんからの影響を受けているかもしれません．そうすると間接的にいろんな人がつながるはずです．地域に生きる我々は，「私の，今ここから」考えることを通じて，自らの思考・行動を導く理論を構築・更新・伝達しています．そのための実践の場が，この地域学総説だったと僕は思っています．

少し長くなってしまいました．この話に対して，皆さんはどう思いますか．それが僕からのサジェスチョンです．

（村田）ありがとうございます．「違う」っていいなと思いながら授業を聞かせていただきました．社会学的な発想に囚われている僕には，話せないお話をしていただけたと思っています．「あなたにとっての地域学とは」という最終課題を考える際に，今日の白石先生のお話はとても参考になると思います．皆さんは間違いなく，地域学総説のなかで様々な世界の見え方，しろうと理論に出会ったはずです．「わたしのいま・ここ」にどんな気づきがあったでしょうか，それをレポートにしていただければと思っています．

では，次にグループディスカッションに移っていきたいと思います．

4．知の共有

（稲津）　今からグループディスカッションを行います．先ほども白石先生からあった地域学総説との出会いを通して自分自身の世界の見え方，見立てがどのような変化を経験したのかというテーマで議論してください．17 時半を目処に話してもらった後，意見をシェアします．残された時間で関係教員も前に出て，内容に関して質疑応答するという構成で進めます．ではどうぞ，自由にお話しください．

（稲津）　どんな話をしているか教えてください．

（学生）　入学してすぐの地域学入門の講義で，地域学の話があったときに，それは科学でもなくて，何かの地理学とかでもなくて，生活を大事にしていてまとまりきっていないから，あなたたちも考えて一緒につくっていこうね，みたいな話があって．この講義を受けて，改めてそういうことだったんだなと話をしてました．何か新しい概念が見つかったとかではないけど，いろんな世界があって，それで私も私で自分の世界が見えているというだけで，その人たちのいろんな人ごとに世界があるよね，みたいな話をしました．あんまりまとまってないです．

（稲津）　はい．ありがとうございます．まずはこんな感じで，シェアしていきましょう．こちらの 3 人からどなたか，よろしいですか．

（学生）　一番この授業を受けて私が変わったところは，何か優しい気持ちになれるようになったなと思っています．例えば，関根さんのお話にあったように，アイヌの文化で，机にジュースか何かがこぼれても机が飲みたかっただけと思えたら，すごい優しい気持ちになれるじゃないですか．私が机にお茶こぼしたときも，何かやってしまったわ，いう気持ちに今までなっちゃったけど，一瞬でも，机が何か飲みたかったからと思えたときに優しい気持ちになれるし，それは他人に対してもそうで，生きてるだけでいいよと言ってくれて，何か優しい気持ちになれるなと思って，この授業で一番変わったのは優しい気持ちになれることだなと思いました．

（稲津）　そのほかの方，こちらのグループですか．はい，お願いします．

（学生）　地域学と離れてしまうかもしれないですが，総説の授業を通しては，やっぱり知ることが一番大きかったなと思っています．いろんな講師の方が来られたんで，いろいろなお話を 1 回知ることによって僕たちの思考が広がっていって，でも，その中に，何か自分に必要なことであったり，いらないことっていうのが結構あったりして．講師の方でも覚えているお話とか，結構印象に残っているお話もあれば，あんまり覚えていないお話もあったりして．でも，それを通して聞いていくことによって，今後の自分の考え方であったり，生き方であったり，地域との関わり方を改めて，考えることができるんじゃないかという話をしていました．

（稲津）　ありがとうございます．そちらの皆さんはいかがですか．

（学生）　堂々巡りでちゃんと議論をしていないんですけど，取りあえず世界観はすごい広がったし，知識も増えたよね，っていうのは割合にそう感じていて．今の話を聞いて，みんなで話していたのは，いろんな理論，しろうと理論を学んで結果的に何になるんだろう，という問いを考えていました．自分なりのしろうと理論を構築したとして，でもその後，私たちはどうするんだろうね，って言ってたんですけど，どうするのかが何も出てこなくて今に至っています．あとは，地域学って何だろう，という話をしていて，何か地域学って一人一人のものなんじゃないっていったら，みんな共通のものじゃなくていいじゃないという話も聞けて，面白い授業だったなって思っています．

（稲津）　ありがとうございます．では，お願いします．

（学生）　自分たちが話していたのは，自分たちは「普通」だと思っていて，この話を聞いたらそうい

う人もいるんだと思ったけども，そうしたらあれ，自分って「普通」だったっけというふうな，そういう「自分とは何だろうか」という内容を話せたのがよかったです．あと，そうですね．地域学は，今まで自分がつくっていたものが，もろいもの，例えば今，砂浜に造った城みたいなイメージだったのが，こういう新たに気づけたことでちょっとずつ崩れていくんですね，でも，その崩れたものをそのまま直すのがいいのか，新たにまた作り直すというか，元どおりに何とかならないかとか．多分，完成しないものなんだろうけど，この城を徐々に作り直していこうというのが地域学ではないかという話をしていました．

（稲津）　はい．ありがとうございます．いろんな例えも出てきて面白いですね．はい．

（学生）　はい．僕たちのところでは，今まで生きてきた 20 年間で自分の蓄えてきた知識が全て正しいわけじゃないなということを知る機会になったと話していました．例えば，大学で言えば制度としてカウンセリングをする場所があったりすると思うんですけど，地域には例えばお寺があって，住職の方に頼ることができるという，そういうセーフティネットがあることも知る機会になりました．あるいは用を足すにも，トイレでするだけではなく，野ぐそするという自分が知らないことを知れた場になりました．それによって，［今までの知識を］問い直す機会にもなったかなという話をしていて，自分のこれまで学んできたことを別の視点から聞くことで，それを問い直すという機会にもなったというのが，総説を受けて僕らが気づいた点であります．はい．

（稲津）　はい．ありがとうございます．まさに生きる理論の問い直しという感じもしますね．地域と関わる上でのオプションが増えていく．では，こちらはどうでしょう．お願いします．

（学生）　私たちは自分の核になるもののヒントをいただいたというふうに思っていて，それまで自分の中にあった核であるはずのものが，何かあんまり明確ではないというか，前を向かっていて，これと表現しにくかったものを，いろんな意見をお聞きして，そこで，「いや，その意見はちょっと自分には合わない」とか，「いや，すごく共感する」っていう出会いを経ることで，自分の核になってるものは，こういうものなのかもしれないっていう気づきがありました．そして，その話を聞いて自分はこういう人間かもしれないっていうような，自分の方向性に関わる気づきもあって，それはどうやって形成されたんだろうねっていう話をしながら，あまり回答が出ないまま時間がきた感じです．以上です．

（稲津）　はい．ちなみに核って何ですか，どんな核？

（学生）　何か自分が生きていく中で大事にしたい思いとか，考えみたいなものが核っていうのかなって思います．

（稲津）　なるほど．ありがとうございます．じゃあ，こちらの方，どうでしょうか．

（学生）　この講義でいろんな方に来ていただいて，それでいろんな理論を教えてもらったというか，聞くことになったんですけど，それで自分たちの見方とか，考え方も変わったと思うし，それでコメントシートなどで自分たちの考え方を，また講師の方に質問とかで見ていただくことで，もしかしたら，その講師自身の見方，考え方も変わっていくのかなって．そうなったら，間接的にその講師と自分たちが理論を通じてつながっていくのかなって思いました．

（稲津）　はい．ありがとうございました．自分たちが受け手であるだけでなく，こういうフィードバックとか感想のやり取りを通して，講師側にも何かしらの変化があったのかという話でした．実際，黒川さんとか本当すごいですよね，数万字かけてレスポンス書いてくださって．僕が担当した講義というのも大きいですけれど，学生の意見を通して夜間中学の印象を知ることは，すごく刺激があったということを仰っていたので，今言われたことは，本当にあるなあと思います．はい．じゃあ，こちらの方，お願いします．

（学生）　はい．3 人で話していて，「地域学って何だろう」って話になって，結局まだ答えは出なかったんですけど，僕の個人的な意見として，結構授業をいつも退屈して寝ちゃう癖があるんですけど，この授業だけは何か大切な話とか，アイヌの話題とかもとても興味深くて寝させてくれなかったっていうか，寝る暇がなかった授業でした．はい．これは意見です．

（稲津）　ありがとうございます．では次の方，お願いします．

（学生）　私たちは今まで A と B を通してたくさんの講義を受けてきた中で，共感できる講義と共感できない講義があったりして，じゃあ，何で，何でその講義には共感できて，この講義は共感できなかったんだろうっていう理由を考えたりしました．それで地域学，私たちにとっての地域学って

いうのは，改めて自分の考えを見つめ直す機会というか，改めて自分の存在価値を知るというか，そんな意見を交わしました．まだまとまってないんですけど，そんな感じです．

（稲津）　ちなみに共感できる講義，それで，あるいは共感できなかったところで何かそれぞれ理由があるんでしょうか．

（学生）　私たちは 2 人とも意見が似ていたんですけど，共感できた講義が恵比寿新聞の講義と，ドキュメント 72 時間の講義で，その理由とかについてはまだ深掘りできてないんですけど，あまり共感できなかったのは，柳沢さんの講義で，その理由をまだ考え中です．

（稲津）　何でだろうね．そこが白石先生も言われた自分自身の中に持っている理論と他者の理論との距離感かもしれませんね．でも，共感しえないものとの対話の仕方が分かってくると，普段見えてくるものも変わってくるかもしれないね．自分にはどういう背景があるからこそ，この話に共感できる，それとも自分はどんな価値観を持ってるから，この話には共感できないっていう感じで，個人同士の差じゃなくて，やっぱりその背景にある地域観をもとに考えたり，分析してくれたりすると最終レポートも深みのあるものになると思います．例えば，「この人の話に共感しました」みたいなことを書くと，ぱっと見，よく見えるかもしれないけど，でも，そうじゃなくて，共感し得ない部分には何があったのか，ということを考えることが実は対話としてはとても大事な部分だと思います．そこは皆さんだけではなくて，ほかの受講生の皆さんもぜひ意識してもらうといいんじゃないかと，はい，思いました．ありがとうございます．あともう 1 組ですね．じゃあ，そちらの方，お願いします．

（学生）　今日教えていただいたことを中心にお話させてもらって，出会ってしまったら戻れないっていう言葉の出会うっていうところが，それぞれの講義の理解度によって意味が変わってくるんじゃないかっていうような話と，そこからしろうと理論と絡めて今まで自分たちが生きてきた中で培ってきた内容で，自分の中で強く思っていることみたいなことについてお話を考えました．

（稲津）　ありがとうございます．先生から．

（岡村）　そうですね，具体的には黒川優子先生の御講義を受けて，今自分たちが学べていることのありがたみを感じることができて，その後，稲津先生と呉先生が振り返りの授業をしてくださったことで，じゃあ，なぜ今までそのありがたみを感じることができなかったのかということを，歴史的な背景や社会構造を踏まえて考える必要があることに気づかされました．現場の知と専門知の相補的な関係を，本日の白石先生のご講義によって明確に理解できたことを確認しました．

（稲津）　ありがとうございます．岸本先生，村田先生から岸本先生にコメントのリクエストが来ています．

（岸本）　岸本といいます．私は日本史を専攻しているものなんですが，今日のお話は非常に興味深く聞かせてもらいました．聞きながらちょっと思ったことがあります．私の世代は，ベルリンの壁が壊れ，昭和天皇が亡くなり，ものすごい大きく社会が変わっていくような経験をした．その中で，それまで信じていた理屈や理論が目の前で壊れていくのに，それについて周りの方はあまり語ってくれない状況を見てきました．

それで，何で語ってくれないんだろうとか，我々の経験をどうやって整理して次につないでいこうとか，すごく悩んだ時代だったんですね．どんどん世の中が変わっていく中で，この学部に来て地域学そして地域という言葉に出会ったのはすごい意味があった．どう今の社会を捉えたらいいのか，そのヒントになると革新的なものを感じたことがあった．国単位とか，世界単位とか，いろんな形が崩れていく時代の中で，新しい単位を私たちはどうつくっていくのだろう．そこでこの地域という言葉はやっぱり非常に重要になると感じながら今日の話を聞きました．感想です．

（稲津）　ありがとうございます．個別で先生方にお尋ねしていきましょう．じゃあ，続いて小林先生お願いします．

（小林）　今回はゲストスピーカーの先生方が余りにも私と関連する方ばかりでしたので驚いてしまいました．私の実家は畳屋をしておりましたし，現在私は少年少女のサッカーコーチをしております．また，「土に還るべき大便」の話に関しては日頃から農作業をしておりますので身近に感じる問題でした．今日も朝 4 時から畑で作業をしてきたのですが，ラテン語で「フムス」は腐葉土を指し，「ヒューマニズム」の語源になっているんですよね．ですから，分解・合成により豊饒化された土壌から生物の連鎖を考えることは日常的に感じる感覚でした．皆さんも是非農業に携わってみてください．そもそも我々が食べている物は，生命の連鎖からできているという単純な仕組みについては，

講義室で学ぶより鍬を持って大地と向き合えば自ずと認識される感覚でしょう．だから，学生さんの皆さんにはこれから是非色々なことを体験して欲しい．

また，現在は人と人との絆が希薄になったということについて，私はカウンセラーをしていますので一言．学生相談をしている際，来談される方に「これまでで一番辛かったり，困難に感じた時はどんな時でしたか?」と尋ねることがあります．大抵は受験の時という回答が多い．たまに，家族のことや身体のことと回答する人もいますが・・・．これを少し冷静に分析してみますと入学する前までに，受験以外は特別な家族の事情でもない限り，学生の皆さんの多くは平和であったということを物語っているのかもしれません．先ほど，村田先生はつながりっていうことを１つキーワードに問題提起されましたが，その質問自体に「今日の社会において繋がりがなくなってきた」という問題が内包されているように思いました．つまり，私たちの生活がそれなりに楽になり平和な生活を営むことができるようになったが故に，人と人の繋がりを意識しなくなったのではないかということです．考えてみれば，今使っている机だって，椅子だって，着ている衣服だってみんな誰かが作ってくれた物なのに，そういう自覚を我々は忘れてしまい，当たり前になっていませんか？ でも，そう指摘されると自覚できるし，色々な人との繋がりにはっと気づくことになります．便利なものに囲まれて生活しているからこそ自分一人で生きているような錯覚に陥ってしまう．フォイエルバッハという哲学者は人間を「類的な存在」と定義しました．つまり，ヒトは，一人一人は弱い生物的存在なのでコミュニティーを形成して，自分たちの命を永らえてきた動物なわけですよね．しかし，近代になって社会が安定し個人主義が拡がり「自分が決めたらことだから一切文句を言わせない」みたいな風潮になったきた．しかし，よ～く考えてみてください．例えば，「鳥取大学に入学したくて入学した」という学生さんは本当で自分一人で意思決定されたのでしょうか?　受験情報の偏差値を参考にしませんでしたか? もし，仮に家族や進路指導の先生が「鳥取大学に入るのは絶対にやめなさい」と言われても断固として自分の意思を揺るがせることはしなかったでしょうか?　我々は何でも自分一人で勝手に決めているような思い込みをしていますが，セルフ・ディスクレパンシー理論（Higgins,1987）に示されているように，少なくとも周囲の人が黙認したり，あるいは合意してくれるので自分の意思を貫いているように捉えがちです．加えて，感情は個人の精神活動のように見えますが，極めて共有的な社会現象です．例えば，この教室で「赤ちゃんが泣いていた」としましょう．すると，皆さんはどんな気持ちになるでしょうか? 少なくとも泣いている赤ちゃんに視線を集め気持ちを重ねようとします．いわゆるこれが「情動感染」と呼ばれている現象ですが，それ位人間は社会的存在であり，人と人の繋がりがなくては生きていけない動物なのだということでしょう．ひょっとしたら皆さんは受験勉強を通して個人の能力にばかり関心を集め，頭でっかちな社会認識や人々の暮らしを私事的に捉えてきたのかもしれません．その意味からすれば，絆を断ち切ったり無自覚になってしまった反省から再度自己覚知していくことが大切ですし，学生同士のコミュニティーと地域を繋ぐ導線を幾つも発見して欲しいと思いました．

（稲津）　はい，ありがとうございます．だからこそ，どのように自分にとってのしろうと理論を取り戻すのか，誰かとつながっていけるのかというところに再び論点が巡ってくるのかなという気がいたしました．では，家中先生も，お願いします．

（家中）　家中です．授業でみなさんに会うのは初めてになります．いまみなさんが自分の感想を話されていて，僕が非常にいいなと思うのは，とても丁寧に自分の言葉で大切なことを語ってますよね，それぞれがこれだと思ったことをちゃんと言葉にしてくれていて．それを手がかりに議論を始めたい感じがします．あともう１つ付け加えると，僕らは『アートがひらく地域のこれから』という本を出していて，そのとき僕は「生命体にとって情報とは何か」とか，コミュニケーションモデルのことを書いたんですね．

今日の白石先生の話からいうと，僕が地域学部でゼミ生を指導してきたときに，自分たちを支えてくれる知識を獲得しよう，自分が生きていくための知識を獲得して，それを論文として表現していくということをしていました．そういう話でもあると思うんですね．生命体というのは，そうやって知識を獲得しながら今まで永らえてきたわけです．それと同時に，一人一人がその先どうするのかという話があったんですけれど，そのとき，自分のことだけでなくて，パブリックにどうやって開いていくのかということがあります．パブリックといった場合に，科学もその１つだけど，哲学

では，どうやって人の痛みとか感情とか考えが私に理解できるのか，実はできないんじゃないかとかいう議論があります．それをどうやって乗り越えていくかっていうことがとても大切で，そういう意味でもパブリックな知をつくっていきたいということです．地域学で大切だと思うのは，この 2 つのことです．自分が生きる支えとなる知をどう創り出していくかということと，でも，それを同時にパブリックに開きたい，みんなでシェアしていくための方法をしっかりしたいということです．

（稲津）　ありがとうございます．今のお話はきっと新妻先生の言われる知の公共化をどのように考えるのか，というテーマと近い話だなと思います．知識の構造転換の四象限があったじゃないですか，覚えていますかね．この講義のかなり最初のほうに出た話ですので忘れている人もいるかもしれませんが．こうした方向性をもった知のプロジェクトとして地域学を今後も行っていくわけですね．では最後は村田さんに，またマイクを戻したいと思います．

（村田）　はい，ありがとうございます．皆さんの話を聞きながら，柳沢毬絵さんのお話を思い出していました．柳沢さんがお話してくださったことは，私・私たちが暮らしていくために大切な話だったと思うんです．それは，人を殺すほどの絶望には 2 種類あるということでした．「社会への絶望」と「日常への絶望」．私は社会学を専攻しているので，社会への絶望についてばかり考えていたことに気づかされたわけです．日常に絶望することも，社会に絶望することと同じく人を殺すんだと言われたときに，なぜ地域学総説に，ドキュメント 72 時間の篠田洋祐さんのように日常を描く方から，大変に社会的困難な状況に置かれてるアイヌの関根摩耶さんや女子サッカーの小林美由紀さんまで，幅広くゲストを呼んでいたのか，その意味を言葉にしてもらえたように感じました．日常への絶望を描くためには主語を小さくしなきゃいけない．一方で，社会への絶望を描くためには主語を大きくしなくてはならない．そこに一貫性はなくてもいい，矛盾していてもいい，生きるためには両方とも必要なんだということを教えてもらったと思っています．

最後に，これから皆さんが書くレポートが新たな地域学を創っていきます．どうも大変長い間，お疲れさまでした．どうもありがとうございました．

注記

1）柳原（2020）は，地域学の「“地域”を把握する 5 つの視点」として，以下をあげている．①「客観的・構造的視点」，②「生活の視点」，③「〈わたし〉の〈いま・ここ〉からの視点」，④「歴史的視点」（時間的想像力），⑤「移動の視点」（空間的想像力）」（柳原 2020：99）

文献

柳原邦光，2020，「地域学の挑戦」『地域学論集』第 17 巻第 2 号

資料Ⅰ：2022年度地域学総説講義計画

地域学総説A：つなぐ・つながる（水曜5限 A20義室・オンライン）				
1回	4月13日	村田周祐　×　岡村知子　×　竹内潔	地域学の現在地	対面
2回	4月20日	新妻弘明（日本EIMY研究所所長）　（担当：岡村）　呉	知る・分かる ー地産地消エネルギーから現代文明を問いなおす	オンライン
3回	4月27日	久保木史朗　（たたみ屋）　（担当：白石）	守る・攻める ーこれまでにないかたち	対面
4回	5月11日	小林みゆき　（Weリーグ）　（担当：村田）　木野	とどける ー多様な生き方を創る	対面
5回	5月18日	篠田洋祐（NHK ドキュメント72時間プロデューサー）　（担当：村田）	撮る ー同じ時代に居合わせた私たち	対面
6回	5月25日	高橋ケンジ（「恵比寿新聞」）　（担当：村田）　菰田	つたえる ー難民キャンプにおける情操教育の現場からー	対面
7回	5月30日	柳沢毬絵（NHKディレクター・小説家）　（担当：岡村）	つくる －つくることでつながる	対面
8回	6月8日	黒川優子　（夜間中学）　（担当：稲津）　石山	学ぶ・つながる ー映画「こんばんは２」の世界から問いなおす	対面
地域学総説B：つながりの再検討ー身近で小さい、でも確実なつながりから考える（水曜5限・A20講義室）				
9回	6月15日	伊沢正名（糞土師）　（担当：菰田）	共生とは ー食べて奪った命を（自然に）返すこと	対面
10回	6月22日	関根摩耶（Youtuber大学生）　（担当：稲津）	わたしは、アイヌ ーお互いを認め合える世界がいい	対面
11回	6月29日	治田裕臣（緑浄寺住職）　（担当：村田）　田中	他者と私たちのつながり ー尊いとは	対面
12回	7月6日	白石　×　菰田　恵比寿新聞	伝える ー身近な他者こそ面白い	対面
13回	7月13日	稲津　×　呉　夜間中学	学ぶ ー学ぶことは生きのびること	対面
14回	7月20日	佐々木　×　岡村　柳沢毬絵	つくる －つくることでつながる	対面
15回	7月27日	岡村知子　×　村田周祐　×　竹内潔　×　稲津秀樹	つながりの再検討 ーゆるやかなつながりから考えるー	対面